

重要無形文化財常磐津節を現代から次世代へ繋ぐ

第三回 研修成果発表会

主催 常磐津節保存会



文化庁補助事業
於 紀尾井小木一郎

午後1時開場／午後1時30分開演
入場料 2,000円(全席自由)

解説 竹内道敬

常磐津 文字太夫 指導
常磐津 東 藏 指導

一、後の月酒宴島臺
角 兵 衛

淨瑠璃
常磐津 美奈衛 三味線
常磐津 文字絵
常磐津 孝野

常磐津 文字満咲
常磐津 文字幾
常磐津 紫緒

常磐津 小文字太夫 三味線
常磐津 菊与志郎
常磐津 勢寿太夫 上調子
常磐津 美寿郎

常磐津 文字太夫 指導
常磐津 一寿郎 指導
新歌舞伎十八番
一、大森彦七

淨瑠璃
常磐津 小文字太夫 三味線
常磐津 菊与志郎
常磐津 勢寿太夫 上調子
常磐津 美寿郎

常磐津 和佐太夫 指導
常磐津 一寿郎 指導
一、狐火の段
きつねび

淨瑠璃
常磐津 和洸太夫 三味線
常磐津 岸澤式
常磐津 若羽太夫 上調子
常磐津 祐二郎 松

主旨・保存会会員の指導により講習を受けた伝承者が研修の成果を発表する

【チケットの取り扱い・お問い合わせ】

〒157-0076 東京都世田谷区岡本1-32
TEL:03-3707-3763
FAX:03-3707-2908
常磐津節保存会

后の月酒宴島臺 角兵衛 (のちのつきしゅえんのしまだい)

この曲は、文政十一年（一八二八）江戸中村座の九月に初演された長唄と掛け合いの所作事。上の巻「舌出し三番叟」から二世中村芝翫（四世中村歌右衛門）が三番から角兵衛獅子、五世瀬川菊之丞が千歳から鳥追い（女太夫）、五世松本幸四郎が翁から勇み肌と、それぞれ引き抜いて見せた所作事である。これは芝翫と菊之丞の不和を幸四郎が仲直りさせる為の所作事でもあった。作者は二世瀬川如臥。三世常磐津小文字太夫（四世文字太夫）初演。五世岸澤式佐作曲。

初春の町屋を背景として、鳥追い姿の女太夫と、越後育ちの角兵衛獅子とは毎日の得意場廻りの顔馴染みから恋が芽生え始めていた。その様子を知った勇み肌は粋な捌きをして仲人役を勤める。

新歌舞伎十八番

大森彦七（おおもりひこしち）

福地櫻痴作詞。六世岸澤式佐作曲。六世常磐津文字太夫初演。

明治三十年（一八九七）十月、明治座に於いて九世市川團十郎他で初演、新歌舞伎十八番に制定された。その後、六世常磐津文字太夫（二世豊後大掾）、二世常磐津文字兵衛（松壽齋）合作により前半部分を素瑠璃用として改作された。摂津湊川の戦いで、最後を遂げた楠正成の息女千早姫は女ながらも亡父の無念を晴らそうと、伊豫の国松山の山間に於いて、父を自害させた大森彦七盛長に出会い斬りかかる。楠家の息女と知った彦七は合戦の様子を語る。一族戦死の物語を聞いた千早姫は泣く泣く死出に旅立つ。千早姫を孝心義烈に感じた彦七は、楠家に伝わる菊水の宝剣を正成の怨霊が悪鬼となつて奪い返した事にして、千早姫に譲る。千早姫は弟の正行に渡すため、故郷の河内の国へ帰る。

狐火の段（きつねびのだん）

原作は明和三年（一七六六）大阪竹本座初演の人形淨瑠璃「本朝廿四孝」全五段。

上杉謙信と武田信玄の争いを主筋にした物語である。その四段目「十種香」の続きで謙信館の奥庭。武田信玄の子息勝頼は上杉謙信の息女八重垣姫とは許嫁であったが、親同士が争っている為、自害したと見せかけ、今は身を隠し花作り箕作となつて上杉家で働いている。箕作が勝頼と知った謙信は勝頼を、塩尻への使者に出す。これは謙信の策略で、塩尻には追手が先回りして勝頼を殺そうとしていたのである。勝頼を助けたい八重垣姫はその危急を知らせるため、奥庭に祀られている諏訪明神の法性の兜を身に着け、狐に助けられて凍つた諏訪湖を渡つて行く。八重垣姫の勝頼への情愛を神秘的に表した場面である。

成立年代未詳。初世常磐津豊後大掾（四世常磐津文字太夫）初演。

四世岸澤古式部（五世岸澤式佐）作曲。



〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号
TEL 03-5276-4500 (代表)
四ツ谷駅 (JR線・丸の内線・南北線) 徒歩6分
麹町駅2番出口 (有楽町線) 徒歩8分
麹町駅D出口 (有楽町線) 徒歩8分
赤坂見附駅D出口 (銀座線・丸の内線) 徒歩8分
永田町駅7番出口 (半蔵門線・有楽町線) 徒歩8分